俳諧文庫

十三

へ 5
1139
11

島田蕃根圖書

まづ俳諧におもむくものゝ心は風雅あらんことを願へは
あしといふはなしとはよき人もやさしくいはひ
しやうそくは性を選み一生先人にうつる心乃
ひとつ先師の道をのぼりて生涯をつくすへきなり
けふの家納にはよくほれ〳〵と思ふとのひめる
ほうし金今往来に二なき先達をもとむは分
のぞみ思ふはあし先師俳諧をも志ひ

門 へ5
號 1139
巻 11

諸人と多くまでもつひとなりては病身物は
徒然ならずものゝ催しさるさまにまでかゝる
うしろめたくあさましく侍るさへいとゞ
ものしらぬ人を避けやられぬ者は世の常
なるべき所あまたありとすべからず中にも
おもしろきものゝ侍る白鷺にみけれ
ひとへなるぬ老も忘れし侍れば此時の

此徒に白楽天が曰し侍りしはいふとものゝ
きよらかなやさしきは古の佛生の道の業にて
おのづからなるはひとつ耻を残すや心にかなふ
ありがたくなれど何某の子乃つまなど
いとおもくも果は極まるなりと物仕に
出る風雅の道を好きまさにあるなれと
身の隠れすみてこそ文に拝みなし

それはさらぬ句も此集のかしらにおき
それ捨ひあつむるのついでに吟摸てひとつらくに
誰そ書つらねて自ら集めくれとあつめぬる
その人には見えきけなきとむつらなれと後人はまゝ
よりて此集の風雅乃ちまことありこや依然
一時人といふと忘打雨の窓にてしるしけて

蓬垣炉扇述

春の部

新正

弓ハ常不二ハ生るまゝの春

四ッ谷のうしも見よ花咲る

ゑつる水る洞もとけて岩の春

山静かれハ海ぞ長閑なり

みさをりも恵方も神の御恵みか

御代の春花もなくいはれけり

あら玉のとしを三百の氣とこそ

暮歳

暮の雨は花とそあけにあけくれ

ともに言葉は末をとめてた

御のことさら気ながれ何

うしとおもふまゝは

月日ゆく年よりや河内を強姫め

霞

神垣の女橘男橘もかすみけり

なかき世の新よまれて露けれ

梅

梅か香は元来るゆかしかる白ひや

門の内の草履も廿ぬ余なひか

おのかすは強て我のか梅のも

きれいさや梅は老木の美しき

うえつし化謙は海ぞと急ぐ

ともしあしをかし路なる梅のえ

み梅よまちハうつりぬ山中しき
かくしハ去年のなある梅のもと
梅れ花とうろきしぬ匂ひハ
まいりのあかそ梅ハうつくしき
よしみより筏ハまくらのもと

柳

たしかにゑとハ拝ぬ柳しハ
なみなくて風情さしさる柳かな

うちけぬるまりハ柳の風情かな

鶯

うくひすも小町か呆ハまるあへし
うくひすれ鈴懐もあるゝ窓の月
鶯乃こゑしおけて鳴すかな
うくひすの身にもあれ初音かな

春の月

春の月酒にゆるして凄かなし

河鹿の子は崖にかくれすや春の月
浅草川のともし子春の月

蛙

蛙鳴やうらへ物かい時もつま
昼中や松乃蛙乃ひとつとき
嬉しいら聲あふへて啼蛙

春の雪

春なかまへや雪も惜まれ降りしき

ちるまの香根子の海老もあれしき

本門寺

光悦の筆乃ひかりを留る解か

春の雨

氷るれぬまてえたり春の雨

春風

春風にちり合ぬけしあるが
ちるさきの月に御手借ひまなか

椿

のとけしや椿かもとに出るほろのまよ

常盤にはまじりてなる椿かな

白魚

しら魚もとろつくちなる白ひかな

春の水

まさおくのゆくろの下に春あり

雛

ちひなにかゝる紙さや猫か妻

海棠乃咲てふ井にたひかな

三月三日家のにさきなる
夜うら雪ひらきのうちにちは
さきら戸柳みしのわすらき末に
まなかし　その上にひとかう
ありくらいて雨ぬもし
ありしく

うくひすの声にめらするらひかな

雲雀

法師の堂の上にも帰りけり

涅槃

ねはん像画書も仏なしあれ
鴨の羽あつまり涅槃のまへあり

花

見わたせばみよしのは志らくれ桜
海さへや川ながら盃ならぬのやま
山ちるや花より出しる刀かけ
あの花へ人は傍しはすみもせん

花のあるさかりみなさくらは
いとざくら雲の上なり初桜
こゝろ人のうしろさそふ花の山
ちるあさかひなのこちなすむん
さくらの花見人と人は
まかりけるやまへつまふ咲
出されい
恥しやゝぬとむさかるゝくわ
見せりしも綻ぬをとしらむの山

白ゆし花かきたるの花の宿

月あふや酒よえゑふおもふ色

六師追悼法竹老母を悼
まそ

ちるしすやむる後をききれ

人の見ぬ花もしをへし吉野山

ありもおりおきて持の小化珠

春の海

春の戸よすれふしてよ春の海

春の柳　乙名

一いろに白みやゆし春の柳

乙るやこくまずしてくる谷の糸

桃

湯豆腐のさめるも無きに桃の色

桃さくや若の若緒の付むり

象鼻
神原山

いとゆふまこころちくつくえかり

行路

まくらとし居るらちんの旅ころも

藤

惜まれしもみてうきうら藤の花

田も山もあをしあけてやふるのも

行春

ゆく春や海も野も雲のいろ

山もの鐘ふしまちを惜しとそ

暁月夫人の故蒙想 二句

さまにりあの中の不二の山

まれにまさりまれあし ふしの山

夏之部

更衣

こゝすゞきされさうそ衣

師の坊に似もてゆかんこゝろもち

灌佛

人も月も一ゆるあり仏生會

秋津洲の国すゞえて花御堂

短夜

こしら根八州も声の待明ぬる

蒲団たゝみ出ゆくこゝのつより
すゝて旅人を宿をはとてあく
とつぎあふのれい

短夜をこゝろある酒手に饒へる

夏の月

あふみる人のみゆしや夏の月

能宮も又おかしなつの月

牛の戸へいらぬものなし夏月

深閑としては宿かる月夜哉
出るとしらぬ乃出れは尾ぬ宿の月

郭公　閑子亭

ちらさ世にあらぬのまに郭公
まちまちるあかつきけし時鳥
あけぼのし啼て来るる杜宇
海らり濡きくそもらきん
早らを夜にあかる夏の夜や子規

河やかへしはえしちる此時鳥
画まうくとぶとく戸あり蜀魂
望帝老まくしつるにあしまの
聞あかしくなかしなかし初鳥
かくにあまはらはそれ闇なる

牡丹

里のぬけさやせる牡丹のあまり
世の塵は物いまひすちかんか

欵冬花

うきつゞくきるゝせぬうしきくば

すりしやや蛙のくひあしに欵冬も

山ちるやりうろつみも似ぬるつゝ

若葉

葉あをくみしらぬ若葉山

一日の旅る眼あれしけふくば

卯花

卯の花に目をさましたる夜ぞ

しおりや涼む侍はなし一休

あくまでや卯のはなくさし啼さくる

松魚

一むきたるをしたゝかる松魚かな

くらつきるしくりぬきをし初鰹

芥子

京町は見しくやけしの花

艸の戸の菊離に旅をと嘆きける

菊女濃

なれしや小くらさきて松が枝

五清る

愛染まくても常にえても分ける

さらさりや原の小松のうけ柱

うしろくあくるもりありあり雨

きららりやすまふの菊後しれ

菊女のうりすてし小ら行らるゝ代に

さくられのあてぢらり和歌の浦

くりの花も　如年

夏の旅にまはりつくりや野の花

つらむもうえ候咲そりくるのむ

ふ依乃あまきらりし野の花

角にあれし菊のものかゝらす

端午

この五月菖蒲檜皮葺にも茅葺にも
雨なしといふはまことにあやしき件
みしる夜をとふくあやめの匂ひ哉

蟆子

ねむのしらまたみえてかくれ
まことしからの記録につまれ
いまにこそ野なかのさくらひとつ
かあつかさの妙のかくれ
上の名り

蟆子われゆゑにくすも淀せんかな

田植

早乙女のこしたなかりや田の長哉
夜ひるとて田植のめしれ上出かり

田つくる

酒くさき人にはよしや飯茶碗
夜田見やちりちらとらつく男哉

蠅

某井

生鯛のあいまにもてくる蠅の声

蚊

三ケ月のかさもまた侍る頃かな

水鶏

隠家は水なき家も水鶏かな

門くゝりやるを待うへの水鶏かな

あかりてさゝなくしはのはやかり

蓮くゝくみ露をのせかり

山室

世は暑し山家のとけぬ様かな

夕顔　夕立

夕白きしみを倍きしらかな

夕立やきらりして扇かけ馬

夕立に路は昼なく嵐のあと

暑

海の夜乃あつれはあつき戸口かな

あしくつろいてみきとり果て

風

一ちらぬ麦刈あとや瓜の花

涼

すゞしさは堤てやかゝる池の気

岩窟のもとまして涼しや竹のけ

夏衣るに忘れて涼し鰭かもし

夕月

雲輝の心もこゝろ夕月夜

いつまでん夕月ふみうつる写身の

川骨

川骨や生茂るまゝの水の音

不二信

小田原は遠き(の)角さは不二信

九合目は咲しも霞し不二信

清稜

物をあく心きかし笹とひ

山里や庵のくるゝあかしの夜

秋之部

立秋

たつ秋とうつるこゝろや小さかつき

うき流を後みの舟橋秋やくる

そのまゝ妹てつゐる都の秋

桐一葉

時しるはまたつとそろ桐一葉

猶つゝこしくらす桐のひと散

七夕

七夕のあはぬあきゝ候るあし明ぬ

山里は松にひとつ只星今宵

七夕や林巣の所乃こゑくしき

露

おく露やうらおくさある草まへ

露つゆや諸紋入頭る風のひま

露つゆや水引草の巧者る

露の夕や秋ハ葉の門もなき

秋風 初嵐

ゑるさしも初嵐さそふ松の風

ゆらぎや花さそふさえ娘の風

由比ゝ山家の夕やまつ風

魂祭

こよひ月日なる父を別れて

独きとは閑かり斜ふしき

魚をとりてまゐらせて

うれしや仏の稲の実のりたる

盆の月

花の香を照す盆の月かな

世の中やうきをしる盆三日

燈籠

見えてゐる中の塚乃灯籠かな

つれなきを此世の人の灯籠かな

灯籠のうちをとりつゝ十二坊

踊

鏡見て井しも出て踊かな

神妙にしてみせるさの姿

新霜

我ながら花月をこの人し情かな

深月なを松の老

あはれさや風寒き跡も稲葉哉

草木乃身にしむ露をとりし色

ゐなかにも咲き眠ハあし　芝青
あきらかや水のとすくらぬ岸にさき
ゐるもの花をたへて所住み
越　笠考堂
あきらかや名おくま候ちらく
芝
を川にやおりくる芝の種
四ツ谷はいくつの仕のすきと

江の紀やすゝきハ消るおもひもの
頃ハ香まつみる芝の那
萩
日和るや川ひとのよ萩の香
綾取
萩金子にも乙きふくある筑波山
きるもの
まの人々よ口の小傍しきかくれ

黍稗に雨のおとはやきりぎりす

稲　八朔

早稲の香やまつの上乃日に定りし

八朔や人は四十にとゞまりし

新酒

うらみには味しくありし新酒かな

待宵

待ありやりもいはぬ斤左衛

まつよひや友は誰ふうくまなし

月

さりあきてしれ月やはのうけ

としくに膳さ病ぬ月見かな

名月やてしいふれと蛇追

限くくり里によける月見かな

名月や先ては空れひくきうら

武蔵野や詞くまなの月

名月やことに隠るゝものゝなし

招の井を子を育し老し
親の狂をとゝて衣食住の
ひとつにて足らぬ神ともし
ちかひは去りて一鉢をかし
こゝぬは法きまりのさきを
さすらひこえくかう

此人まさに人なりなよの月の友

すゝはれめて何をよの月をくり

侍従宗匠了きて二つ月

雨の月そこにも居るこの素様

既望

いさよひや霧にまきれしめぐる

芒浦千いさよふ月の秋のかた

いさよひを付ぬ比よのききくさ

雁

こゝの鳩ハこゝ死ぬ気て雁の声

年寄の兼服ハ新下の丁く

雁鳴や保谷の北乃橋多し

きぬた

すむ月にすゝみつきしきぬたかな
こゝろ子の葉くるのつきし旅かな

紅葉

浮くもり乃はらおちきたりもみぢかな
そのかゝるしれあつまると杖のもみぢかな

葉山子　吟子

このはの紅葉に小田まで立葉山子

山風に此の笛みつく葉山子かな
秋ふかや鳴子引音振生段

庭の月

見れ出乃様といふきて庭の月
ころあてこゝろよきさまのもの月

巻きまいこのあるもと
やあらしあらくもしの
かれさま

河瀬くりぬ行先てし庭の月

秋の雨

あきの雨きのふはむかしなりにける

枯あしく寒さ勝りや秋の雨

女郎花

馴染なやくね人にあふき女郎花

いつくしく末より枯る女郎花

畑さやつゆとこぼれし女郎花

虫

風の上ゟ鳴や草中の虫のこゑ

虫の音も昼一しきりむしりかな

あさ照やみつけし虫の鳴すさひ

鹿

家まもる里はむかしの鹿の声

草むらに鹿つみぬ角いたいたり

きこくきいてかうまきた鹿の声

そのしるしや立出ん山の鹿

鹿の寄る沼の庭にもとゝくかな

菊

百姓の門もつくりきくの花

きくの花弥代志らぬハ口惜き

山ちかや猪ひとつるきくの和

菊乃香や徐おまてあるじの忌志かな

人はそよふものあるなふの菊のはな

月海き

志ちきすゝき菊にわたる水の音

秋の草花

鬼灯も虫あつまるや草の中

露草やちよみえぬる秋のいろ

山里ハ志しも通さず露の庵

秋の暮　竹好

ともしけて世の事おもふ秋の暮

秋一日慈悲ぞけふ盆ぞろそろ

影啼や神の九月もかみなわ

冬之部

時雨

竹のはのそよくおとふかく時雨るなり

弱さらし人の上りしふるか

天八此傍ちれたかし一志くさ

うつきいまさ時雨乃ゆうか命もつ

玉みの部いさやさ時雨るに

池此氣券も給来しそう一時雨

行ときしハ袖ハ濡さぬ志くれの
おもしろしや時雨の後の識
花藤垣
袖ハ稲ハ人の時雨もうらむし
須磨寺ハ行も濡らん小松時雨
しくるゝや鞠子代官の二刻増
とききおもる唐のぬけゝる時雨哉
十夜

参詣代邑ハ淋しき十夜哉
芭蕉忌
ゆくとしの中ハ淡き代時雨かは
花ちるもおもし時雨乃一雫
名わる忍や追にの松代いくつえ
時雨識
あつさひハ櫻より高時雨し
時雨くしよしハひくつきのいるさ

枯野

なん侍えて虫の跡つく枯野かな

うくくと枯ても月の柳かな

落葉 散紅葉

なけいちる木の葉にまじる世や妓王妓女

あさまりみあそてちるおちばかな

霜

いさり火り人立まゐる霜夜かな

湖カ水ふも更やくさの原

花まさけや冬を忘れし返り花

小春

ときはぎと冬のなさけし小春かな

錦繍も枯原えする小さる菊

枯尾花

まちくまし中にも尾花哉

枯尾花果は貧女のなりかな

絹ふる人は床しやられ尾に

雪

みる雪や物にたつくハなかれとも

まつ雪るひとまつ浮世忘れけり

雪の竜宮の小舟乃ゆきけし

一花降て海まさ時より

ちり雪ととふる二見の浦浪連て

大雪や漏し其新の貢なり

降雪も此中にも月の出汐かな

雪の夜此硯あり竹のむさし音

紫の衣やさくらはあまる影の雪

雪みゆや酒のあるも友まつ

冬籠

小別のなくさも冬は籠るへし

冬枯

上野

鶯なし笹も桜も冬ごもり

恵比須講

世をとゝる見もあくも恵比須講

木の葉ちる名はすゝきの恵比須講

裸なる身にはあつし恵比須講

冬の月　弥のます

冬の夜月入りかれは寒さかな

冬の夜は冬るさき月にえゝかな

ゆくくれ月にいてゝも神のるすち

冬の梅　菊中きさ

よう冬うり咲やひらきあれ冬の梅

静のくりしきゝるゝ冬の梅

人みしてあるやは花の冬の梅

帰花

いまさんくまよくらのこくらむ

一両年はをともちそり帰るむ

ふくらむるもちはなりとても

千鳥

啼ちらし千鳥つらなつてし

打よれる冬田へまいるあるか

十里みえぬや瀬の山ゆかしき

畑中や枝のあかるを鳴すゞる

まつり枝にとまりしちどりかな

冬至

柚味噌のみも参らして来し冬至の夜

師走

橋つかむ車も江戸の師走かな

いろいろの兆をおして年のくれ

幸はりしえく枝や大晦日

年内立春

鶯餅もまつくまなや年のうち

追加

墨田川　四句

八百のなかすゝれや墨田川

なましとて業平の隅田川

好風の様にみくやすみた川

みつくれ雪にあしとめし墨田川

○

去ても見しみりとしもある
　ふね勢鏡くしきへし

絵伝仏の御よしろすま信年の巻

世のみたてころかさいまあまてゆるかり

天保八酉年霜ふり月

天保[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]